

宮崎の昔話―生目・大塚を中心に―

地誌研究家

甲斐 嗣朗

目次

- 一 大塚台団地という存在
- 二 大淀川下流域の境域の確認作業
- 三 生目神社と大塚神社
- 四 宇佐宮領荘園

一 大塚台団地という存在

1. 昭和四一年宮崎県住宅供給公社発足。昭和四六年大塚台団地造成工事、着工。
2. 宮崎県住宅供給公社から入手した地図で見る原風景。
3. 団地造成で失われたもの↓かつての山・道路・田・畑・石碑・小字地名。
団地造成で得られたもの↓多くの住宅、保育園・学校、公共機関、インフラ、新しい商店、新しい人々、新しい地名。
4. 大塚と生目の境界をなしていた山林の尾根の標高の比較
福島町、大坪町、北川内（地元の人の発音は「きたぐち」）、古城、源藤、恒久の境域は？

二 大淀川下流域の境域の確認作業

1. 江戸時代、旧延岡藩宮崎郡に四組・二三村があった。
太田組（太田・古城・源藤・大塚の四村）、大島組（大島・村角・南方・池内・上北方・下北方・上別府・江平・花ヶ島の九村）
跡江組（跡江・小松・柏原・浮田・生目・長嶺・富吉・細江の八村）
瓜生野組（瓜生野・天瀬町の二村）。組には大庄屋、村には庄屋がいた。現在の宮崎市域の多くは江戸時代には延岡藩領で、宮崎代官所は下北方の高台に置かれた。
2. 明治二二年の町村制施行で以下の町村が発足した。傍線は役場所在地。
生目村（跡江・小松・浮田・生目・細江・長嶺・柏原・富吉の八村）
大淀村（大塚村・太田村・中村町・福島町・古城・源藤）。大正六年大淀町に。
大宮村（下北方、大島、村角、南方、池内、花ヶ島）。

- 宮崎町（上別府村、上野町、川原町、江平町、松山町、瀬頭町）。宮崎町、大宮村、大淀村が大正一三年に合併し宮崎市が誕生。市庁舎は上別府村に。現宮崎市の初めての地形図が発行されたのは明治三七年。この地図に、生目村の旧大字境界も大淀村の旧村界も描かれていない。しかし『日向地誌』は、中村町・福島町・古城・北川内は大田村の村域であることに言及。
3. 平和ヶ丘、月見ヶ丘、桜ヶ丘、希望ヶ丘、江南、大塚台、小松台、生目台、花山手、薫る坂などの団地開発で消えていく小字地名。

三 生目神社と大塚神社

1. どちらにも八幡神を祀る八幡神社。八幡神とは第一五代応神天皇（誉田別尊）のこと。生目神社は江戸時代までは生目八幡宮といつた。応神天皇は、宇佐神宮の菱形池で竹の葉の上に立って三歳の童子の姿で顕現し、「我が名は護国靈験威力神通大自在王菩薩」と名乗った。これは、第二九代天皇である欽明天皇の御代三二年（五七二）に起こった出来事である。つまり第一五代応神天皇が「菱形池に三歳の童子となつて」顕現した。顕現の始めから「神仏習合」なのである。
2. 七二〇年隼人の乱の平定に八幡神が参加。現中津市の薦神社の三角池に育つ薦を刈って薦枕をつくり、これをご神体として隼人鎮圧に参加した。鎮圧後、隼人の祟りと思われる病災が続いたので、死者の霊を祀るために天平一六年（七四四）、宇佐八幡宮は日本初の放生会を行った。御神体は寄藻川左岸河口の和間の浜で船に乗り、船から海に蜷や貝を放つのである。この行事は仲秋祭として現在も続いている。
全国の八幡神社の総本宮は大分県宇佐市の宇佐八幡宮（現在地



宇佐八幡宮参拝殿

3. 生目神社の創建は一〇五六年。大塚神社創建は八五四〜八五七の間（いずれも由緒から）。宮崎郡浮田庄は天喜五年（一〇五七）に「神領として開作」されたが、そこに八幡神が浮田庄の鎮守として勧請されて成立したのが生目神社である。したがって生目神社は八幡神を祭神とする八幡神社であった。一方、大塚八幡宮は宇佐大宮司・公順の私領であつ



生目神社（正面奥鳥居）

江戸時代以降、「目の神様」信仰は現実的に広がりを見せ、生目神社にお参りをし霊験あらたかなる経験をした人々が、自分の住んでいる土地に生目神社を勧請する動きが活発になっていった。九州の熊本、長崎、福岡、大分、四国の愛媛、香川にも、宮崎の生目神社を勧請した生目神社が、今も、少なから

遷座は七二五年）。宇佐八幡宮には神宮寺である弥勒寺を建立（七三七年）。奈良で東大寺と大仏が造立される際、八幡神が上洛し、東大寺の隣に手向山八幡宮が勧請された（七四八）。のちに京都南西部の男山に石清水八幡宮を創建（八六〇）。この石清水八幡宮を勧請して源頼義が鶴岡八幡宮を建立（一〇六三）、のち源頼朝が現在地に移転（一一八〇）。鶴岡八幡宮は、源氏・鎌倉の守護神となった。

鶴岡八幡宮が現在地に移転した一一八〇年、平清盛の弟・重衡は南都焼き討ちを仕掛け、東大寺の大仏殿、大仏が消失した。宋から帰国した僧・重源は大勧進職となつて大仏・大仏殿の復旧に努め、建久六年（一一九五）再建供養会が開催された。鎌倉幕府将軍・源頼朝がこれに参加した。

た（到津文書）が、八幡神を祀る神社であることに変わりはない。生目神社が「目の神様」とされたのは平景清を祀り始めた鎌倉時代のからのことである。平景清は謎に満ちている。壇の浦の戦い（一一八五年）で安徳天皇は清盛の妻・時子に抱かれて入水し、平家は滅亡した。その後の景清の消息を史実として追うことは困難で、特にその没年が定まらない。諸資料は「なんとかして逃げた」、「建久七年（一一九六）三月七日餓死」、「健保二年（一二二五）八月一五日霧島で死亡 行年六二歳」と記述し、一貫性がない。

しかしながら、『平家物語』が、鎌倉時代から室町時代にかけて盲目の琵琶法師によって全国に語り継がれ、江戸時代になると近松門左衛門の浄瑠璃『出世景清』が人口に膾炙するようになって、死んだ景清は信仰の世界で生き続ける人物となった。

ず存在する。

四 宇佐宮領荘園

平安時代の半ば頃から九州に宇佐八幡宮荘園が広がった。日向国の臼杵庄六五戸（今山八幡宮）、宮崎庄五〇戸（奈古神社）は、宇佐宮にとつて最も本源的な荘園。その後、宇佐宮領荘園が広まり、日向国には宮崎庄・諸県庄・浮田庄

・那珂庄などの「本荘」が成立した。これらの本荘から別符や名が分立し、浮田庄で見れば、柏原・長嶺・跡江などの別符が誕生している。瓜生野別符や大塚（大塚）別符



八代生目神社(熊本県)



飯塚生目神社(福岡県)



別府生目神社(大分県)



三豊神社(香川県)



景清廟

は、先述のように宇佐大宮司・公順の私領であったから、特定の荘園には属していなかった。

宇佐宮領となった荘園や別符には、宇佐宮に納める貢納物が課せられた。米や絹のほか、放生会料として幟・絹布・トコロテン・相撲・馬・紙・万灯会（懺悔のために仏に一万の灯明を供養する法会）料油などである。宇佐

宮では放生会の際に神前相撲が行われ、浮田荘からは五人の参加が求められていた（日向国では二七人）。

宇佐八幡宮にはその神宮寺として弥勒寺があったが、この弥勒寺も荘園を持っていた。日向国では、日向市の富高（八幡神社）と塩見（栗尾神社・八幡神）、清武の船引（船引神社・八幡神）の三カ所である。

生目・柏原・長嶺・細江・瓜生野・大塚・富高・塩見・船引の各神社は全て応神天皇（誉田別尊）を祀る八幡神社であり、宇佐神宮と密接につながっている。

五 生目神社の二つの参道

『日向地誌』が生目村であげている道路は①隣村往来間道（西の



奈古神社

味野越く東の大塚村界鯉ヶ迫)、②生目神社往還(生目神社から北に延びる道)の二つである。平部嶺南が生目を調査したのは明治八、九年のことなので、前記①の道路はそれ以前のもの。私が小学校五年生頃に遠足で通ったトンネルのある道は①、②とは異なる。

1. 大塚町大坪に残る二つの石碑(セブンイレブンの前のT字路)
 i. 正面「いきめ八まんぐう路」(この石碑が道標であることが分かる)

右面「文政三庚辰年三月建之」(文政三年は一八二〇年)
 左面「施主 清武加納住人 蛭原源太良」

ii. 正面右側に「○○□□□□」(初め判読不能)。のち○○は「宝曆(ほうれき)」と判明

中央に「奉□□□□」供養(□が判読不能のため、石碑建立の目的が不明)

左側に「閏七月十二日」(宝暦年間で閏七月があるのは宝暦九年だけ)
 左面に人名らしき九人の名、「…門」。



石 碑

右面と裏門には何も書かれていない。
 2. 見つかった「新道開鑿歎願書」(明治一五年八月鹿児島県知事宛に提出)。歎願



倒れたままの石碑

を務め、新道開発の発起人となった。

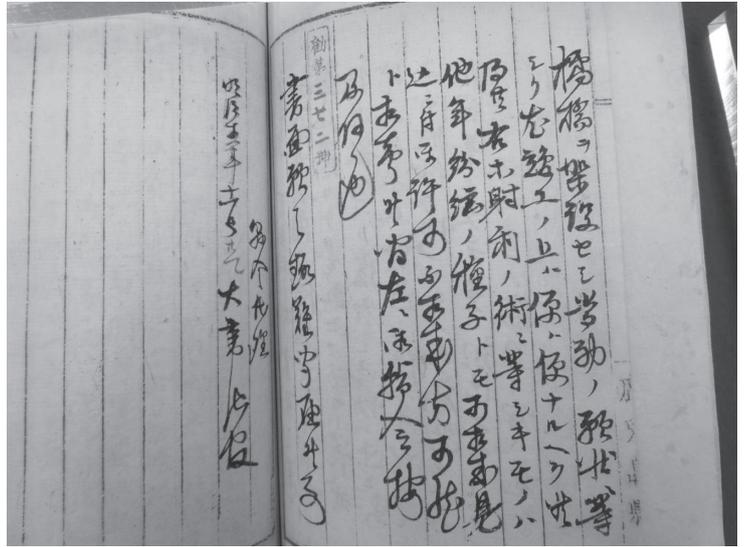
3. 「歎願書」に書かれた一文。「距今百年ノ前該郡福島町豪富後藤忠藏ナルモノアリ生目神社参詣ノ衆庶民及郷里人民便利ノタメ此ノ路線ヲ開キテ寄附ス」(古道)
 明治一五(一八八二年)の百年前は一七八二年で宝暦九(二七五九)年に近い。

4. 見つかった後藤家の墓と見せていただいた後藤家系図
 宮崎市福島町の福島墓地に、恩師・後藤健三郎の名を刻んだ墓碑があった。また、『後藤家系図』に後藤庄兵衛章好という人物が「内藤義英公御代 宝暦九年 大塚庄屋役ニ移ル」の記述あり。先の石碑の宝暦九年と一致する。偶然か必然か。

大塚の多宝寺(享徳年間一四五二〜一四五五創建)の開山は梵忠ぼんちゆうという僧侶であるが、開基(開山の経済的援護者)は後藤家である。つまり後藤家は室町時代からの富豪であった。職業は廻船問屋であり、代々、大庄屋と庄屋を務めた。

5. 新道はいつできたのか

書の発起人は生目神社社司・高妻安やすし。高妻安は児原稻荷こはらいなり神社社司。甲斐右膳うぜんの三男。七歳の頃、生目神社の養子となり、生目村の要職



歎願書

山伏屋隧道竣工は明治二五年（県下初の道路トンネル）。生目の新道はこれに次ぐ二番手。陸地測量部製作の地形図の測量は明治三五年。この地図に新道が描かれている。

6. 『生目村是』によればトンネル建設は恐らく明治四〇、四一年ころ。「山伏屋隧道（長五六m）より長いトンネルを」が生目の願望。長さ六四mで完成。

7. 新旧二つの道路は昭和四六年まで現存。同年に開始された大塚台団地造成工事で消失。旧道は生目神社の東に、新道は鯉ヶ迫池付近にわずかに痕跡をとどめている。
8. 二つの石碑の保存・整備はできないのか。倒れたままの石碑は立てられないのか。